

千代

○新松子神事絶やさぬ本家なり
メゾフォルテフォルテリピート鴉の朝
新豆腐威張って並ぶ朝の市

郁子(岡)

ぐみの木に鴉の早贄川の岸
休耕田いまや一面そばの花
仰ぎ見てやっと出会えた新松子

紀美

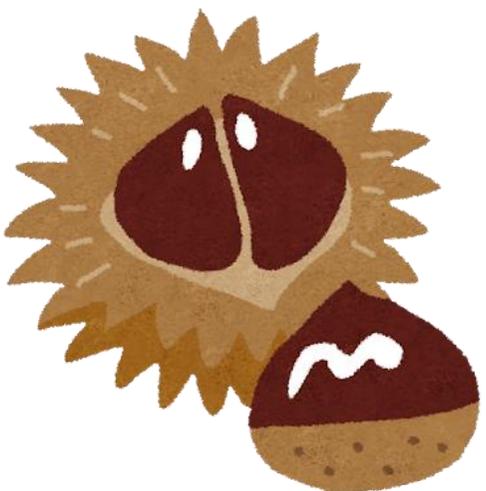
お城へと続く並木の新松子
堀端に枝たわませて新松子
秋の暮れ母の座イスに座り居り

迪子

○栗飯や輪の真ん中に祖母がいた
母を見舞い名残漂う秋の暮
人恋しここにいろよと鴉鳴いて

農子

○参道の空に伸びおり新松子
干からびて木の瘤のごと鴉の贄
碧眼の秋遍路立つモネの庭



初江

○無縁墓守る松原新松子
○鴉猛るなかなか効かぬ痛み止
○旅先の乗り換え駅や鳥渡る

丞子

○山積みのケースと軽トラ生姜掘る
山栗の皮の手仕事皿七つ
奇しくもスーパームーン雲隠れ

瑞枝

○秋思捨つ大道芸の空に捨つ
○赤とんぼ夕空が好き子らが好き
ミサイルの飛び交ふ空や鴉猛る

郁子(土)

○書道展一輪挿しの白桔梗
秋落暉海に一筋光る道
独り居の友との電話ちちろ鳴く

酔花

○松ぼっくりに一言かけて通りすぎ
ひと夏を草葉の裏に住み家とし
雑草も生えぬ戦場目冴える

えり

○新松子拾って沖の青さかな
鏡ダム放流ありと鴉鳴きぬ
くり抜きの南瓜の太き笑顔かな

志津子

○ほんのりと母の夜業の後影
谷間の村に高々鴉のこえ
木犀や束の間古き友の顔

富子

鴉の歌教えてくれ義兄も逝き
新松子今年の蒼を届け便
地球温し細き秋刀魚よ箸を取る

味元 昭次 作品

鴉鳴けば鴉の國なり空青し
選挙とや右に左に鴉鳴いて
うつむいて霧呼んでいる新松子

★次回市民句会

【開催日時】

令和六年十一月二十七日(水)
午後一時十五分〜午後四時(予定)

【場所】

オーテピア4階 研修室
どなたでも自由にご参加いただけます

